

第11回 関西建築家大賞
受賞者の選定について

審査建築家 香山壽夫

選定結果

第11回関西建築家大賞受賞者として
矢田朝士(やだ あさし)氏を選定いたします。

選定経過

今回の関西建築家大賞には16名の建築家の応募がありました。それぞれの建築家が提出されたふたつの作品、計32作品について、6月27日、函面および写真による第一次の審査を綿業会館(大阪市中央区)において行いました。その結果現地の審査対象として選ばれたのは、次の5名の建築家の作品であります。

久保清一(くぼ せいいち) 永元寺 蕪坐離庵
南市岡の家

高砂正弘(たかさご まさひろ) 壁層の家
中谷町の農家

徳岡昌克(とくおか まさかつ) 今津町立図書館
夜久野ふれあいプラザ

長坂 大(ながさか だい) 宇治のアトリエ
淡路島の家

矢田朝士(やだ あさし) ES house - 01
ES house - 02

以上5名それぞれの2作品、計10作品について、8月22日、23日の2日間、現地における審査を行い、上記の受賞者の選定に至りました。

選定理由

関西建築家大賞の、建築賞としての特色は、建築家が自ら選んだふたつの作品を通して表明されているその建築家の設計理念を評価する点にあります。審査員として、そのことに関わることは、誠に刺激的で又与えられるところの大きいものでした。

しかし、一言で建築の理念と言っても、それは思想・姿勢といった抽象的なものから、造形手法といった具体的なものまで、巾広く展開されているものです。今回の審査にあたって、私は、評価の視点をひとつに固定するのではなく、それぞれの建築家の行っていることを虚心に見せていただき、そしてその結果、心が最も強く動かされたものを選ぶことにいたしました。しかし、見て、理解することは楽しいことでしたが、違った理念・方法を比べてそこからひとつを選ぶことは、誠に困難で苦しい作業でした。最後まで、悩みはありましたが、決断しないわけにはいきません。その決断の理由を次に記します。

矢田氏のふたつの作品は、住宅をつくり出す、本質的で、かつ普遍的な設計方法を提示しています。方法概念として鋭い作品は、時に、造形的表現として貧しかったり、あるいは生活との実際的な対応において弱かったりすることが多く見受けられますが、この作品は全くそうではなく、敷地の条件に見事に対応し、住む人の生活を讃美するものとなっています。陽光は輝きに満ちて差し入り、雨は優しく降り込み、中に住む人の表情は喜びに満ちていることに、私は心を打たれました。

一方、このふたつの住宅が、特別な条件の中での特殊解である、あるいは未だ熟さぬ生硬なものである、という評価もできるかもしれません。すなわち、このふたつの住宅は、たまたま共通に、周辺環境条件において、閉鎖・防御性を求められる一方で、地域共同体としての強い親和性が存在するという、特殊な条件における成功ではなかったか、という疑問です。又もうひとつ、内と外の“Shell”のかたちは、共に文字通り「固い矩形の箱」となっているが、それはもっと多様なかたちと開放 閉鎖の度合いをもって成立するものではないか、という疑問です。この私の中での疑問に私は最後まで苦しみました。しかし、私は最終的に、差し込む光を、通り抜ける風と、住む人の笑顔に軍配を上げました。建築空間は、いかなる場合においても、本質的に、周辺から自己を切り出し困いこむことにおいて出発するもので、それに続いて内部を自己の延長として確立する過程で、その空間は外に向かって開かれるものである。したがって建築空間は、常に二重の困いとして成立している。この建築の根本概念を、矢田氏のふたつの住宅は、鮮烈なかたちで見せており、その方法はこれから多様な展開を必ずや実現していくものと確信できたからです。

高砂氏のふたつの住宅は、私を深く魅了し、最後まで私の心から離れませんでした。作品の完成度、すなわち形態の適格さ、素材の選択・組み合わせの洗練、そし

てなによりも、住む人に注がれている溢れるような暖かい眼差し…。

いずれにおいても、氏の作品は傑出していました。評価の観点をそこにおくことにしていたら、悩むこともなく、私は高砂氏を選んでいたことでしょう。

久保氏、長坂氏の作品も、いずれも卓越した力を持ったもので、私は大きな感銘を与られました。この賞が、通常の建築賞のように、単独の作品に与えられるものであったなら、おふたりのいずれかが選ばれていたかもしれません。しかし、おふたりのそれぞれのふたつの作品から、ひとつの像をつかみ出そうとした時、私にはそれを鮮明なものとするできませんでした。

長坂氏について言えば、「宇治のアトリエ」は、建築空間から始まり、その力は周辺・遠景に及んで、完璧な「全体」をつくり上げていますが、「淡路島の家」は、改造した空間の個性的な魅力が大きいだけ、それが立地している尾根の地形にどう働きかけていくのか、未だ私には見えなかったのです。

久保氏の「永元寺 蕪坐離庵」も、建築空間の魅力が卓越したものであるだけに、都市的な、あるいは地形的な、周辺との関係が不安定で、その点は「南市岡の家」が示している確固とした都市的構えと別ものに見えたのです。

徳岡氏の作品については、いずれにおいても、その地域の風土、伝統に対する深い愛情に支えられた設計姿勢に胸を打たれ、敬服いたしました。しかし、地域の公共建築を、権威的なものであるよりは、親しみ易く、日常的な空間としていこうとする今日的な要請からするならば、素材の選択や細部の造形で発揮された繊細で行き届いた工夫が、空間のスケールや、複合のさせ方においても発揮されていたならば、この設計者の特質はより鮮明なものとなっていたに違いないと感じざるを得ませんでした。

以上、5名の建築家の優れたお仕事に敬意と謝意を表しつつ、選定の理由を述べさせていただきます。